

(9) 終末期における療養の場所

1) 死期が迫っている患者

【問 48 (一般国民対象) 自分が治る見込みがなく死期が迫っている (6カ月程度あるいはそれより短い期間を想定) と告げられた場合の療養の場所について】

一般国民において「自宅で最後まで療養したい」と回答した者の割合は11%であった。自宅で療養して、必要になれば医療機関等を利用したいと回答した者の割合を合わせると、60%以上の国民が「自宅で療養したい」と回答した。

前回、前々回の結果と比較し、「なるべく早く今まで通った医療機関に入院したい」と回答した者の割合が減少し、「自宅で最後まで療養したい」と回答した者の割合が増加した (図 118)。

また、延命医療について家族との話し合いの有無では、一定の傾向が見られなかった (図 119)。年代別では、年代が上がるにつれて「なるべく早く今まで通った医療機関に入院したい」、「なるべく早く緩和ケア病棟に入院したい」と回答した者の割合が増加する傾向が見られた (図 120)。

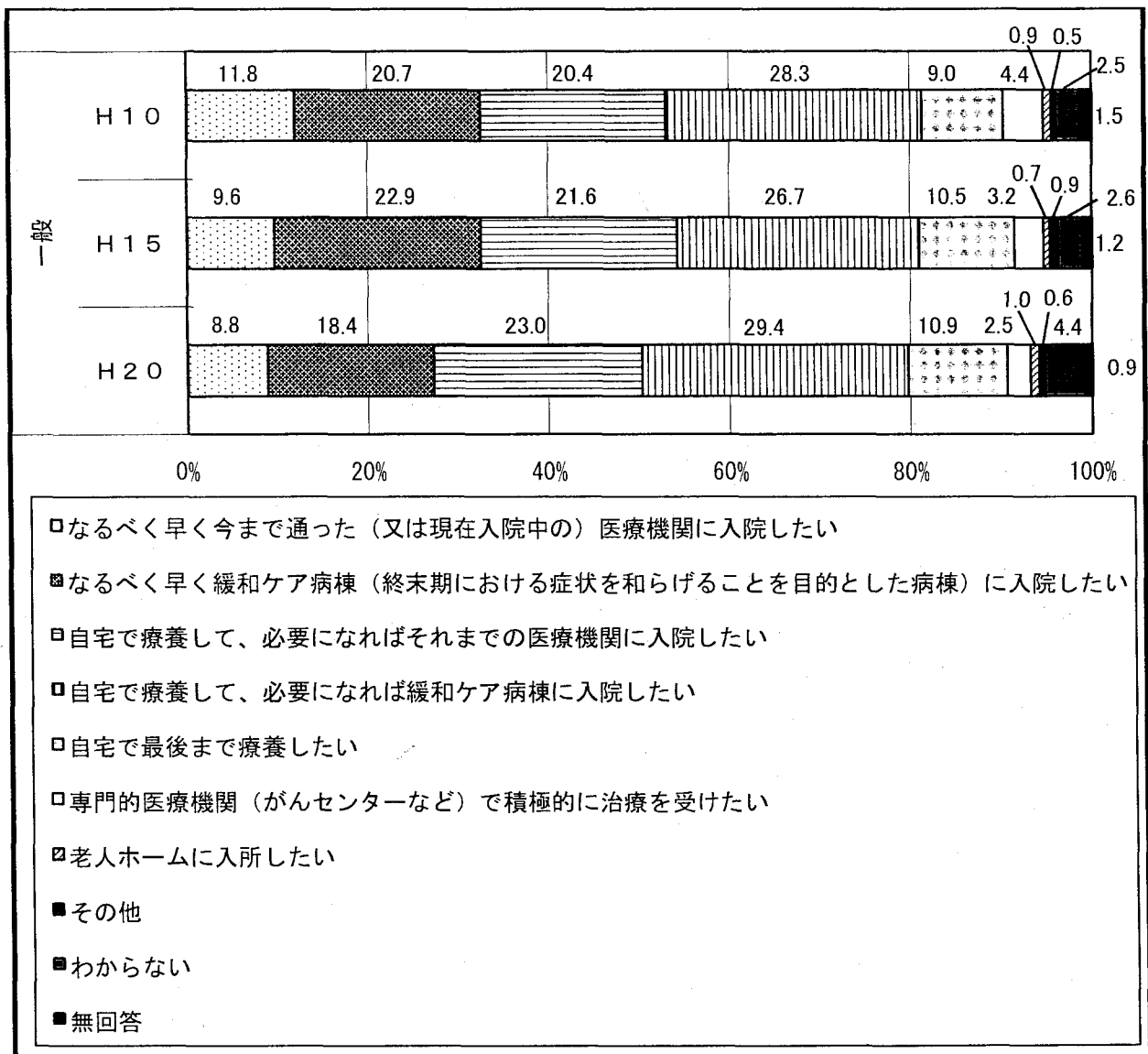


図 118

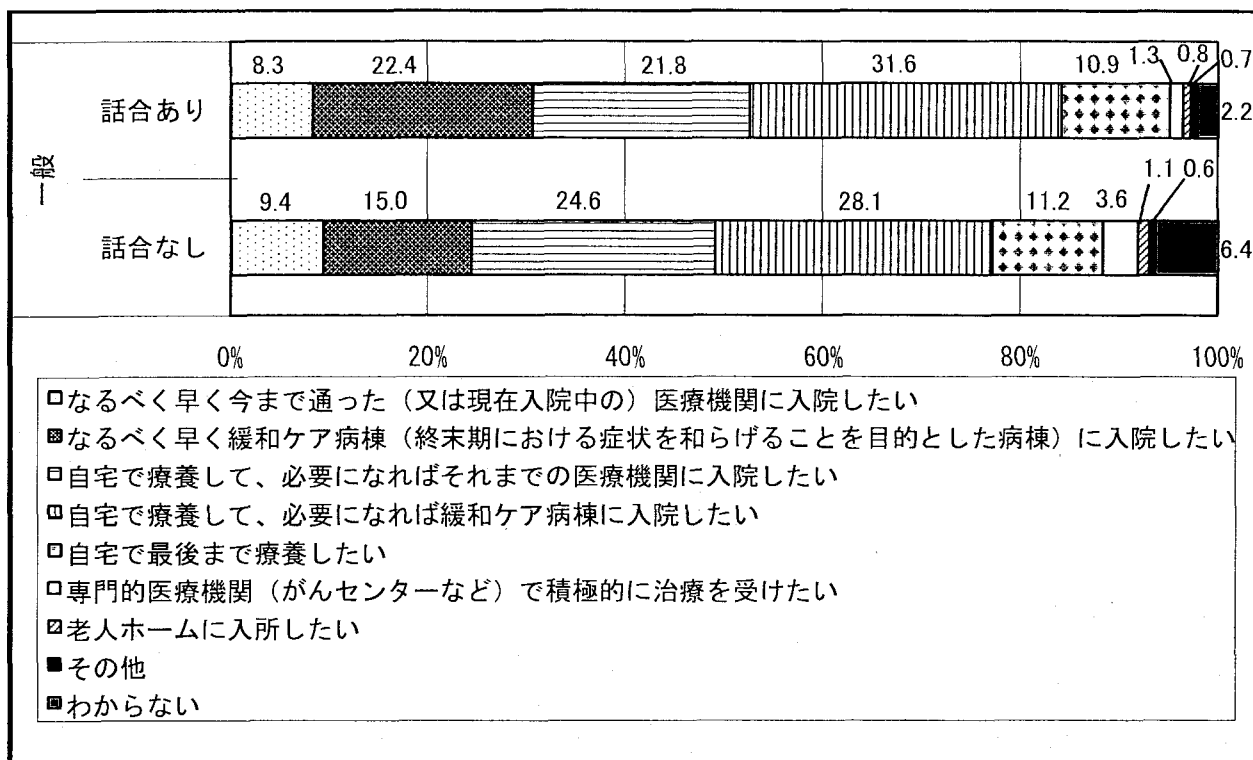


図 119

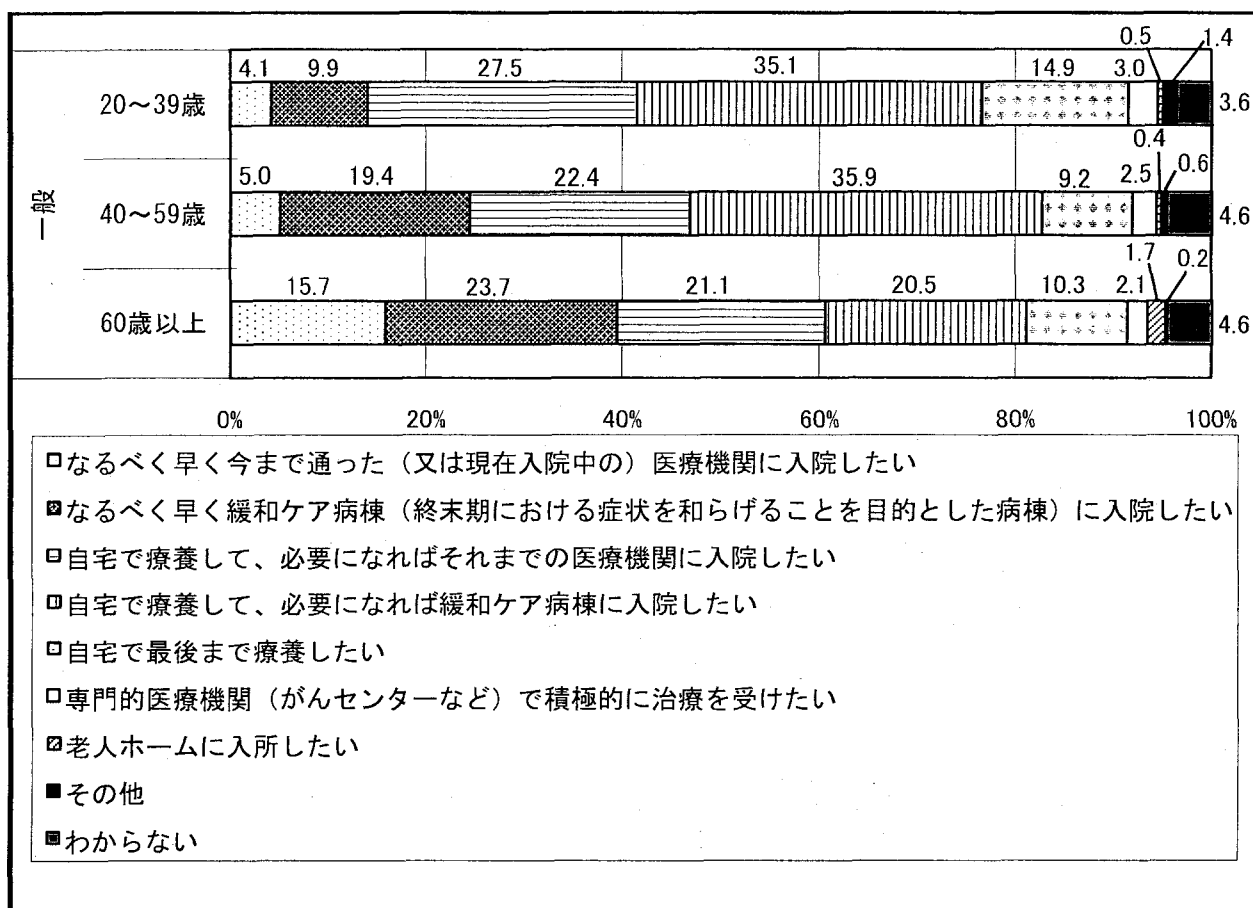


図 120

【問49 自分が治る見込みがなく死期が迫っている（6カ月程度あるいはそれより短い期間を想定）と告げられた場合、自宅で最期まで療養することは実現可能か】

一般国民及び医療福祉従事者ともに、「実現困難である」と回答した者の割合が最も多かった。一方で、「実現可能である」と回答した者の割合は一般国民（6%）よりも医療福祉従事者（医：26%、看：37%、介：19%）の方が多かった（図121）。

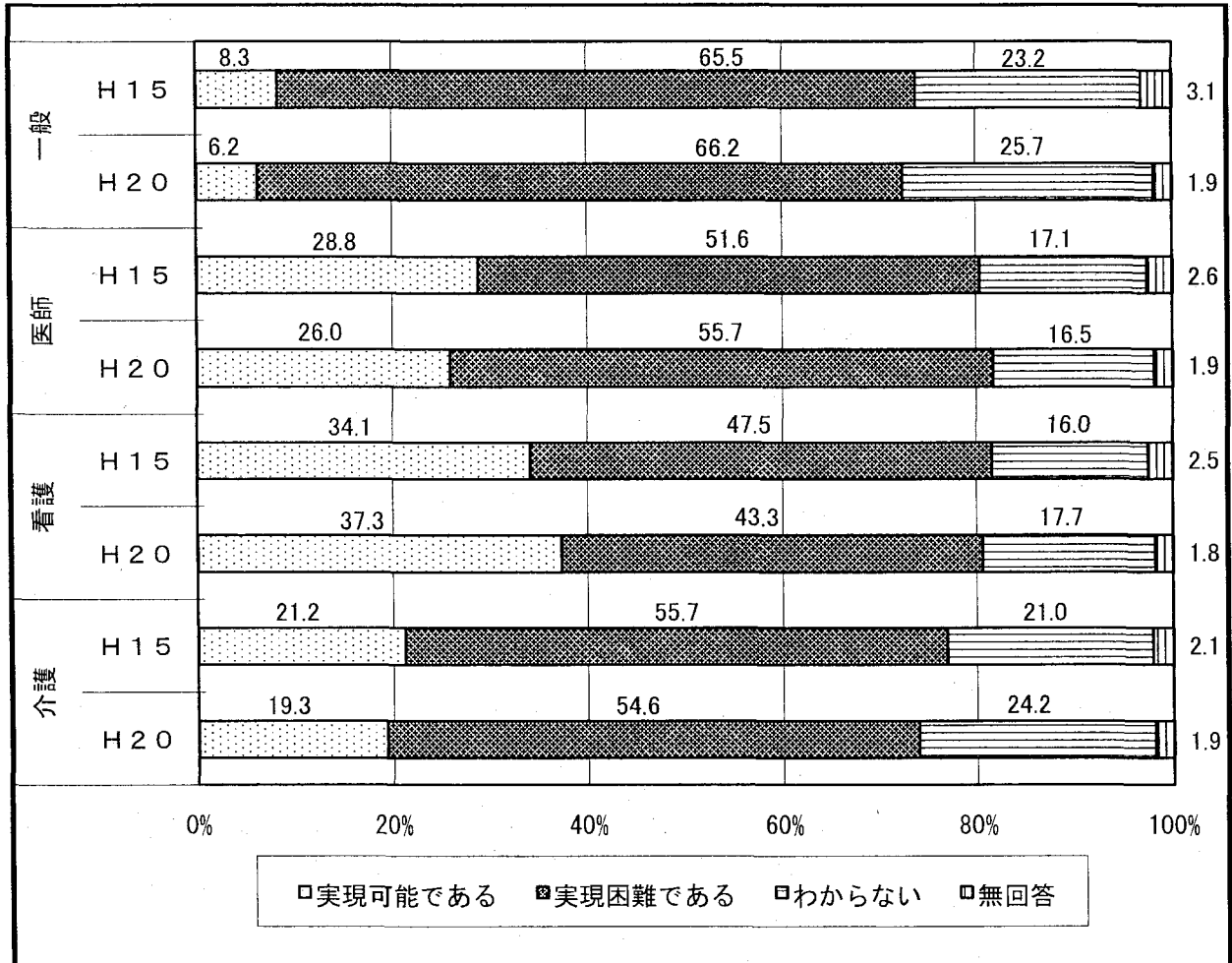
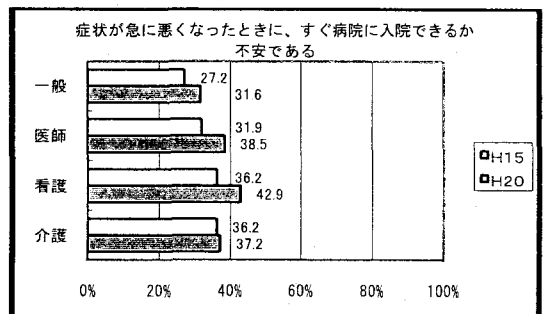
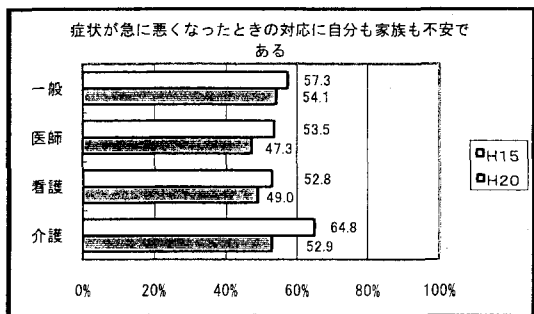
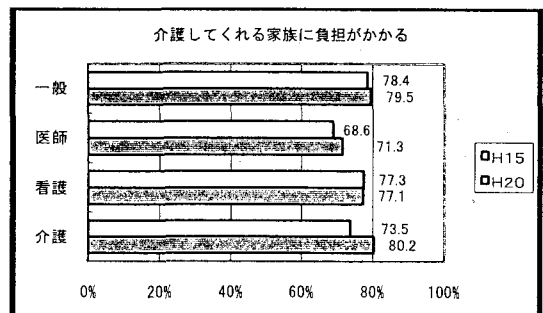
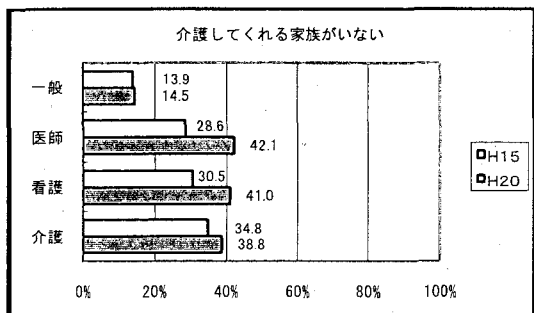
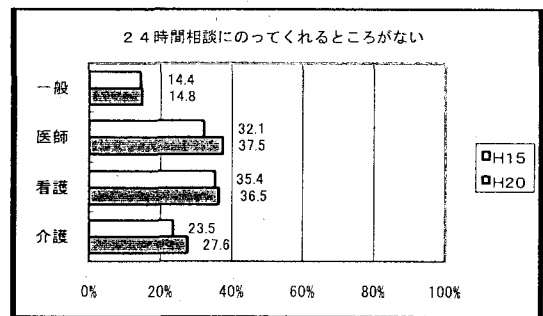
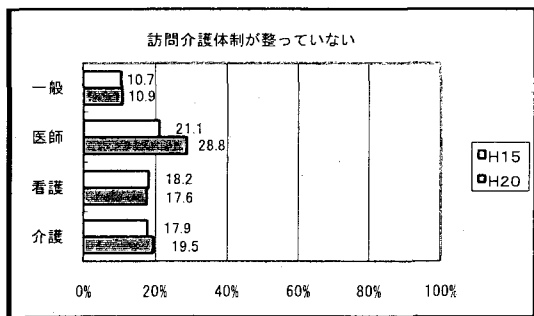
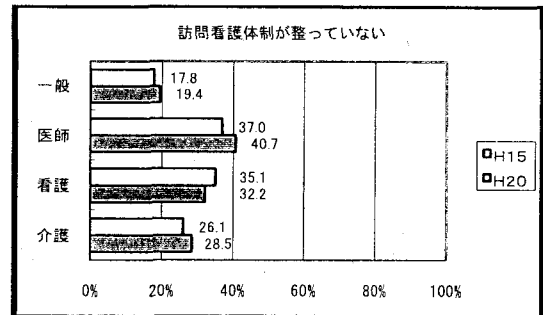
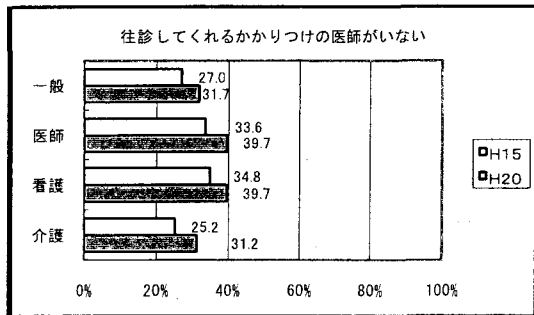


図 121

【問 50 自分が治る見込みがなく死期が迫っている(6カ月程度あるいはそれより短い期間を想定)と告げられた場合、自宅で最期まで療養することが困難な理由(問 49 で「実現困難である」と回答した者を対象)】

「介護してくれる家族に負担がかかる」、「症状が急に悪くなったときの対応に自分も家族も不安である」と回答した者の割合が多かった(図122)。



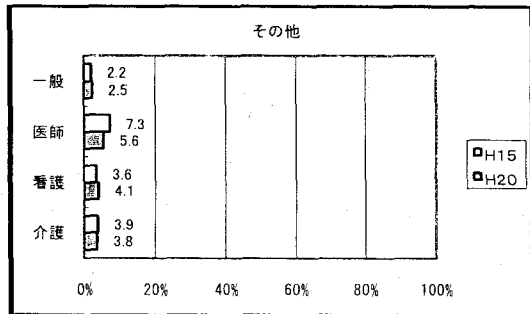
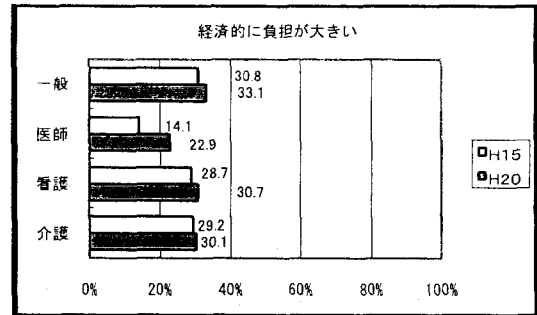
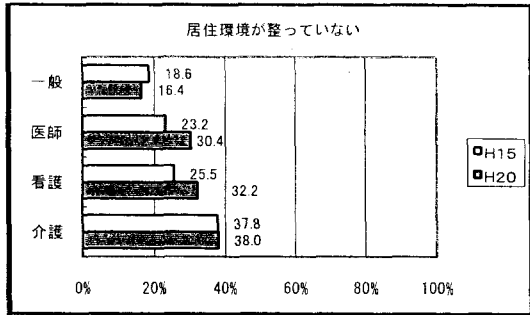


図 122

【問 51 自分の家族、または自分の担当する患者(入所者)が治る見込みがなく死期が迫っている(6ヶ月程度あるいはそれより短い期間を想定)場合、どこで療養することを薦めるか】

一般国民は、自宅で療養して、必要になれば医療機関等に入院させたいと回答した者の割合が多かった。

自分の担当している患者(入所者)が治る見込みがなく死期が迫っている場合、医師・看護職員は、「自宅で療養して、必要になれば医療機関等に入院を薦める」と回答した者の割合が多かったが、介護職員は「老人ホームを薦める」と回答した者の割合が多かった(図123)。

また、延命医療について家族との話し合いの有無では、一定の傾向は見られなかった(図124)。年代別では、年代が上がるにつれて、「なるべく早く医療機関等に入院させたい(を薦める)」と回答した者の割合が増加する傾向が見られた(図125)。

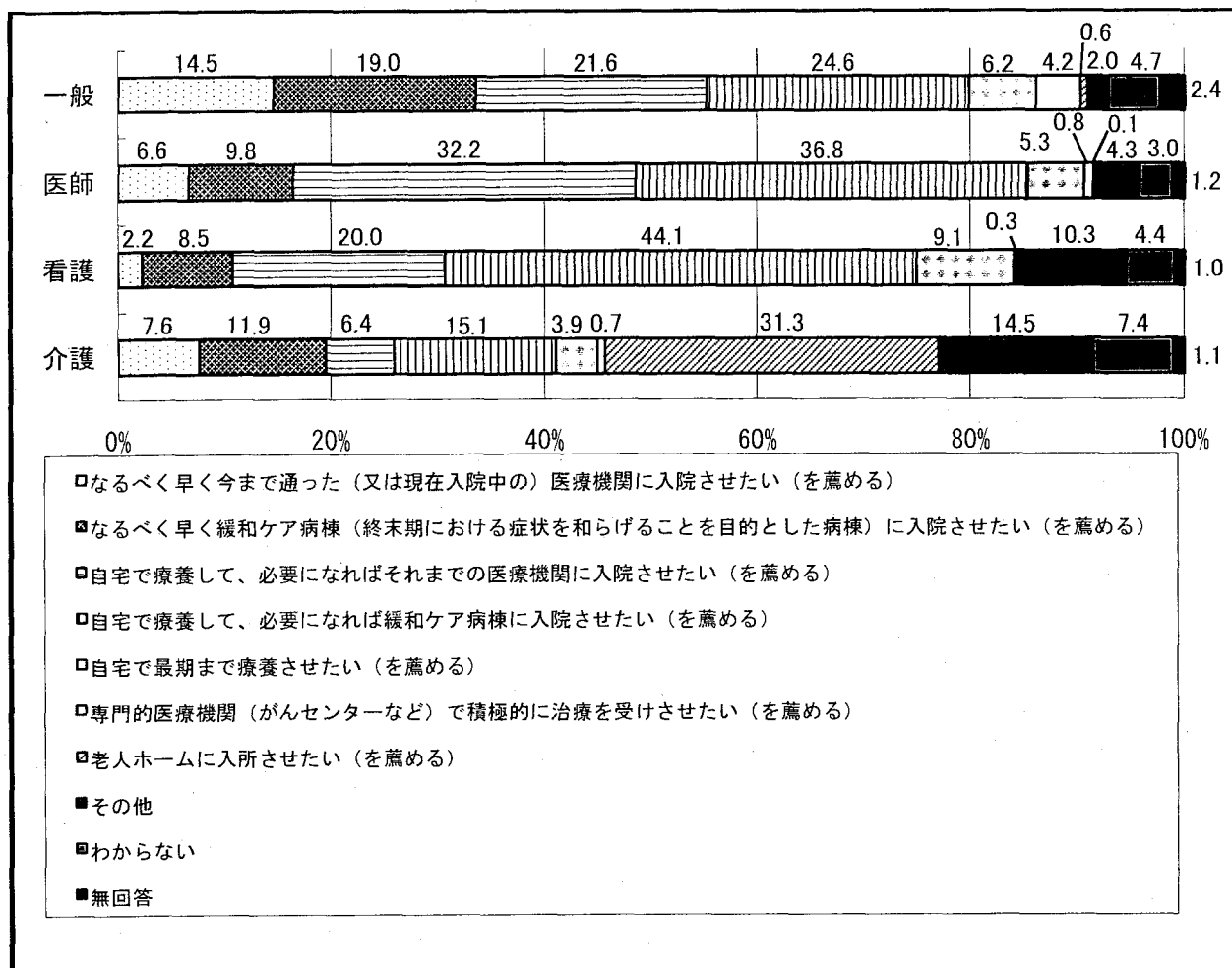


図 123 (カッコ内は医療福祉従事者の回答選択肢)

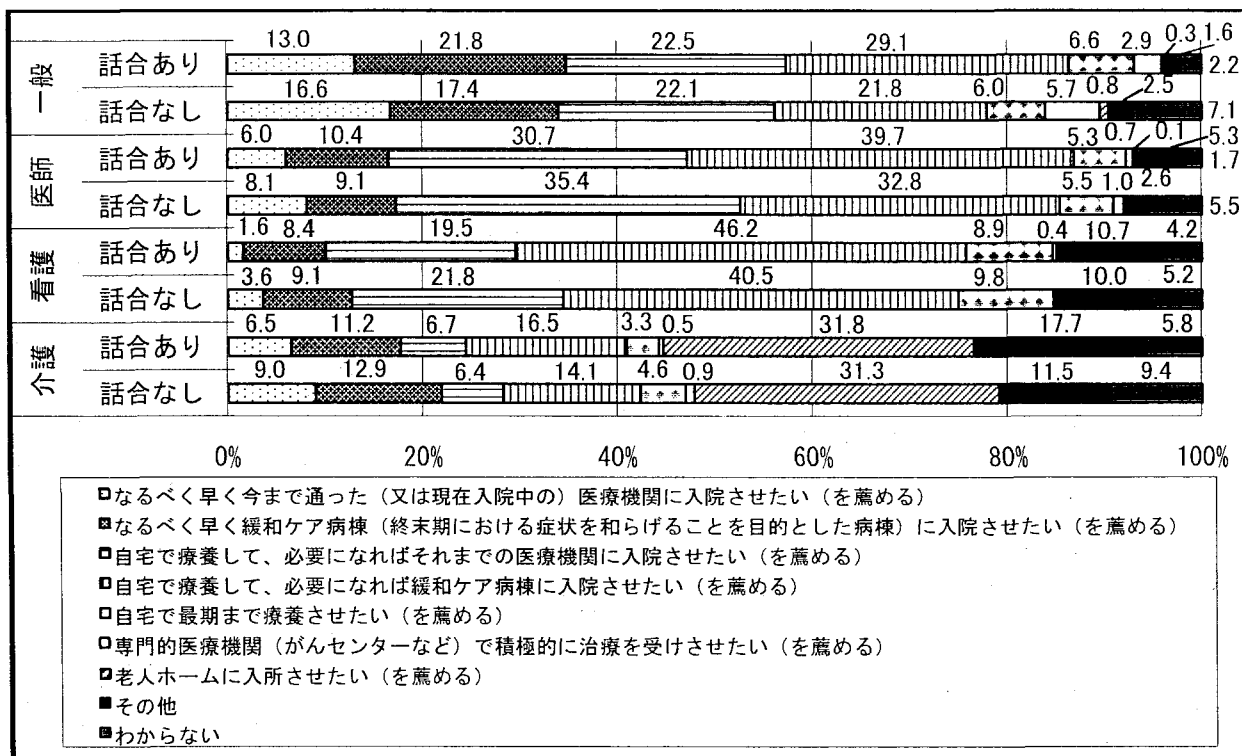


図 124（カッコ内は医療福祉従事者の回答選択肢）

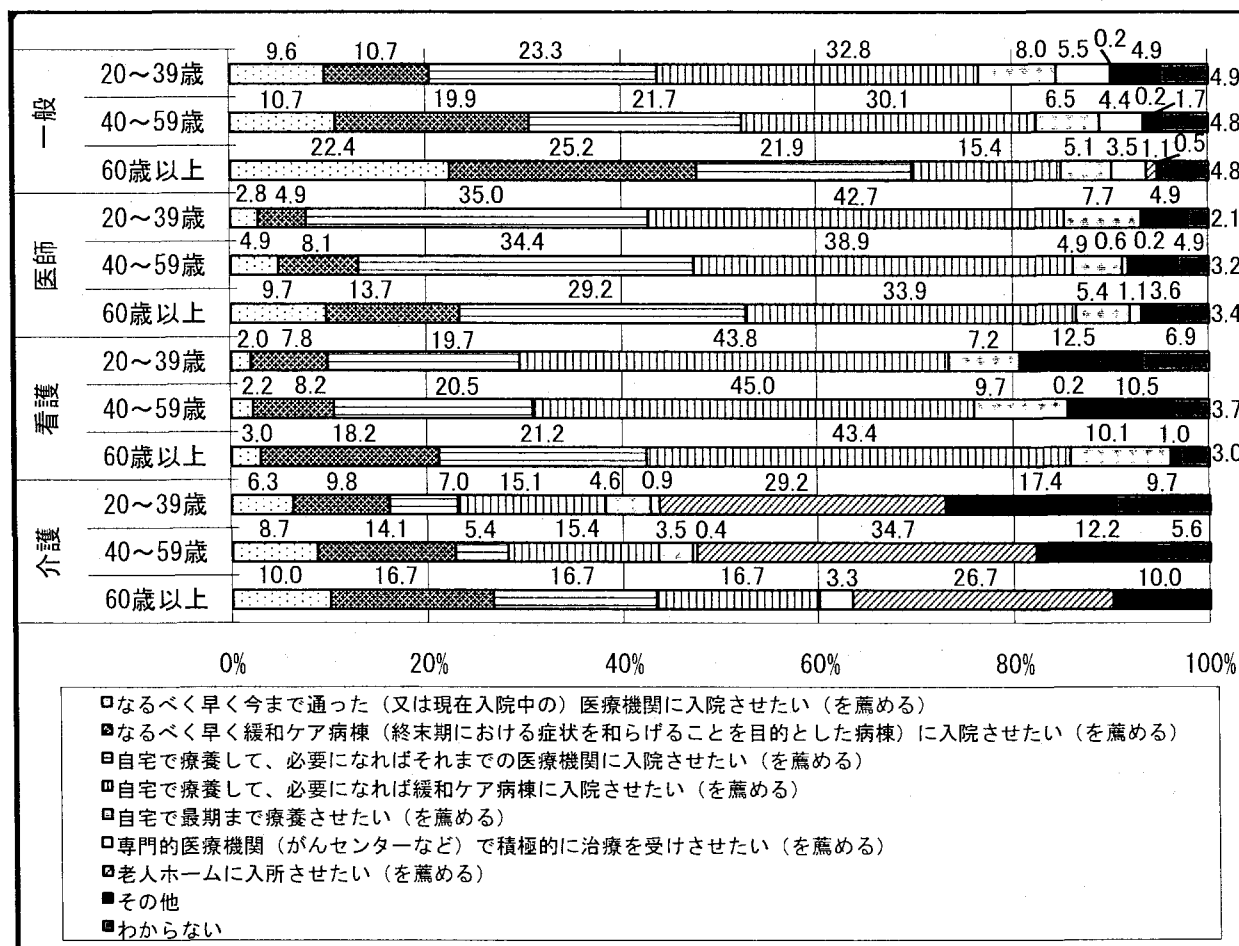


図 125（カッコ内は医療福祉従事者の回答選択肢）

【問 52 自分の家族、または自分の担当する患者(入所者)が治る見込みがなく死期が迫っている(6ヶ月程度あるいはそれより短い期間を想定)と告げられた場合、自宅で最期まで療養することは実現可能か】

一般国民及び医療福祉従事者ともに「実現困難である」と回答した者の割合が最も多かった。「実現可能である」と回答した者の割合は一般国民(8.5%)よりも医療福祉従事者(医:26%、看:37%、介:19%)の方が高かった(図126)。

また、延命医療について家族との話し合いの有無では、一定の傾向は見られなかった(図127)。年代別では、年代が上がるにつれて「実現可能である」と回答した者の割合が減少する傾向が見られた(図128)。

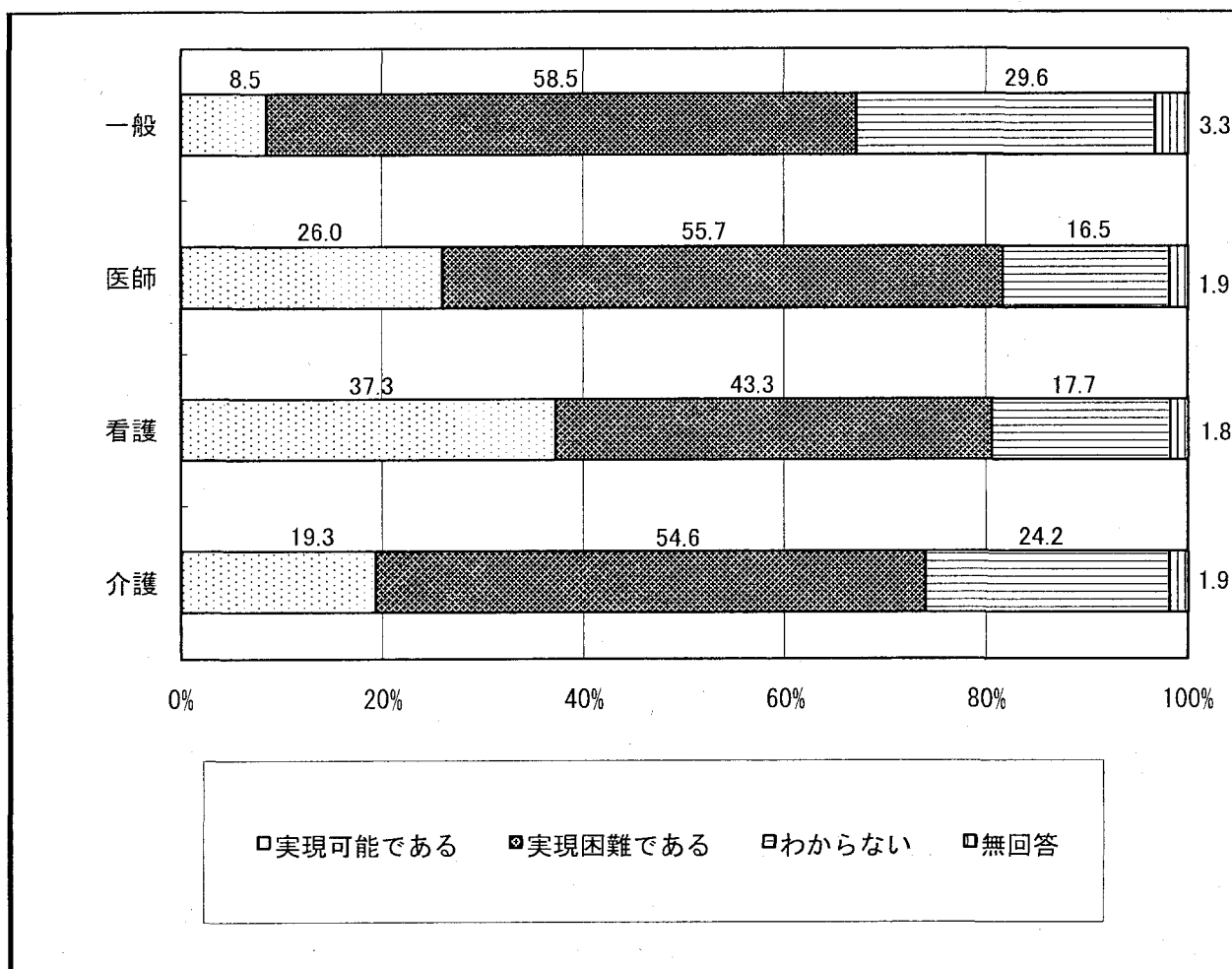


図 126



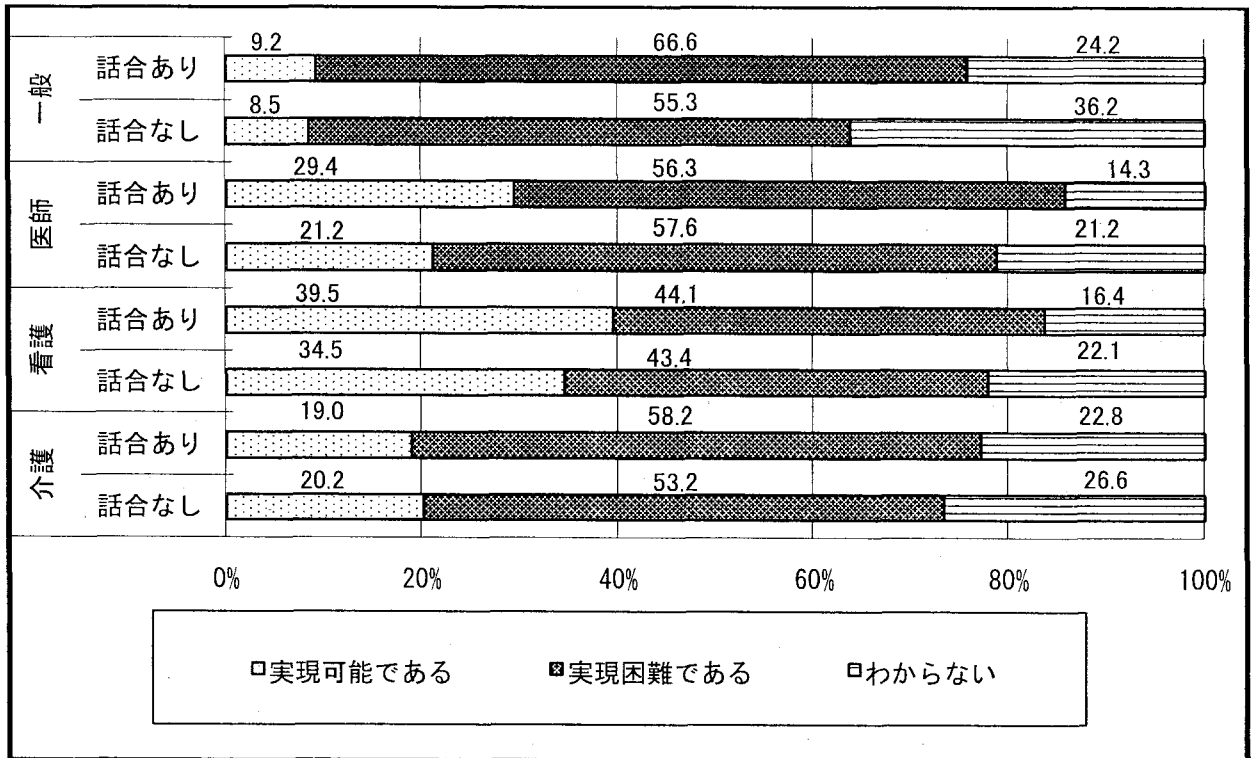


図 127

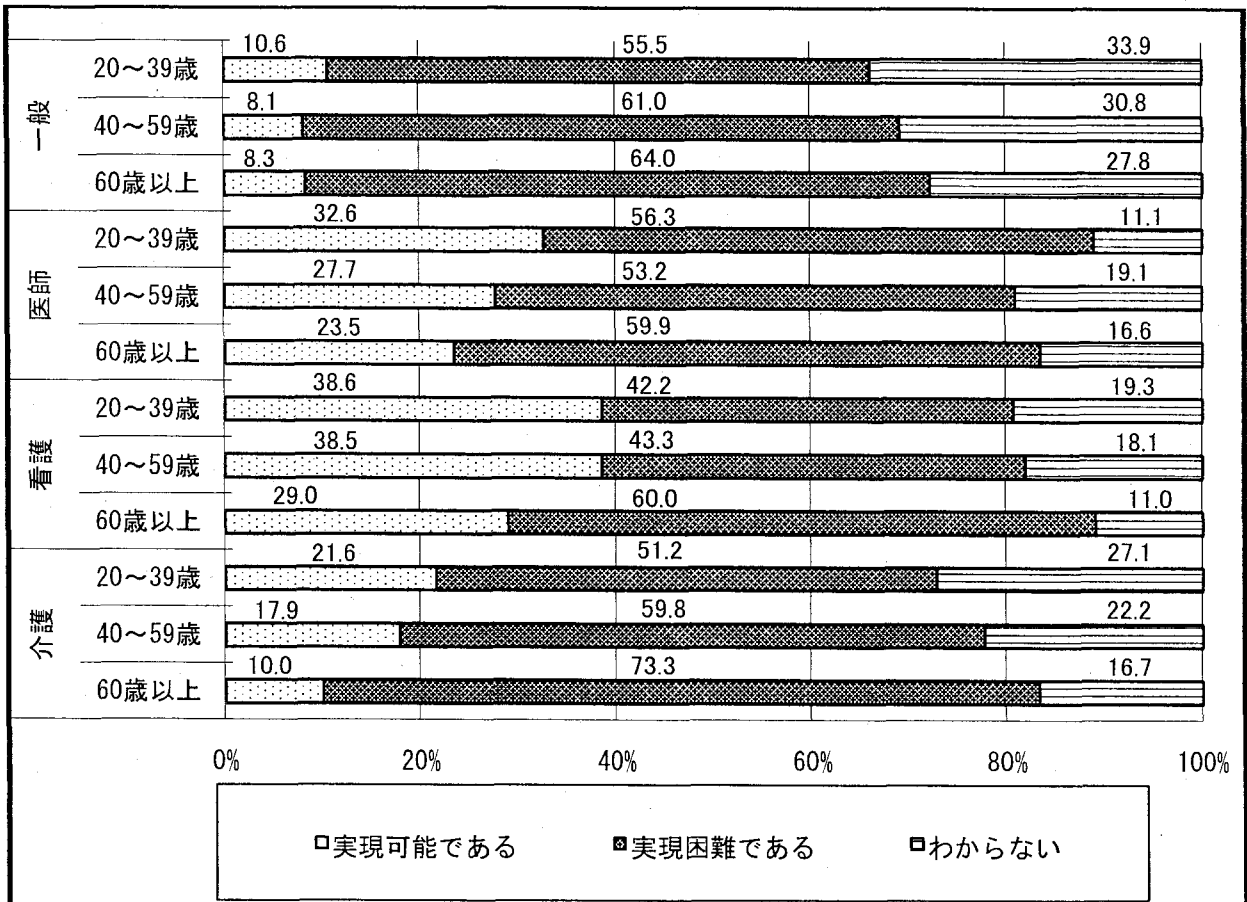
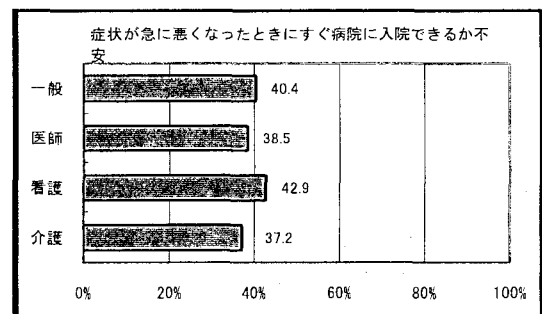
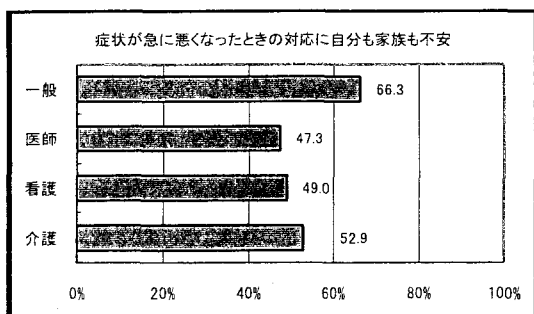
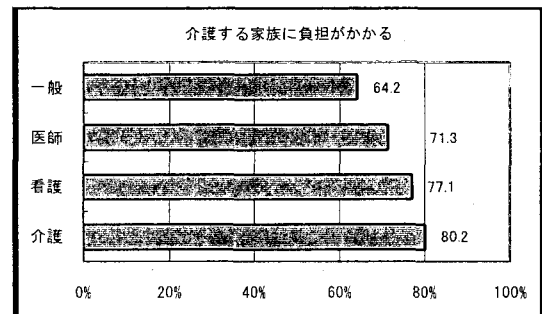
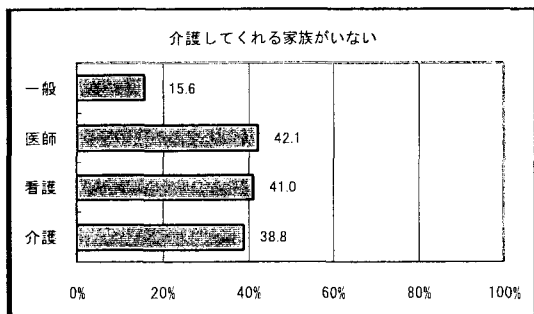
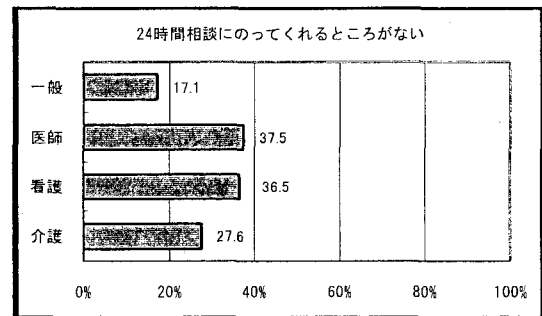
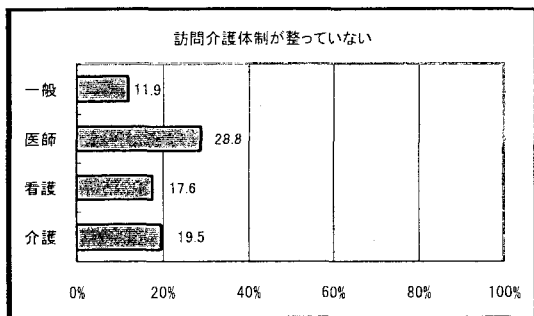
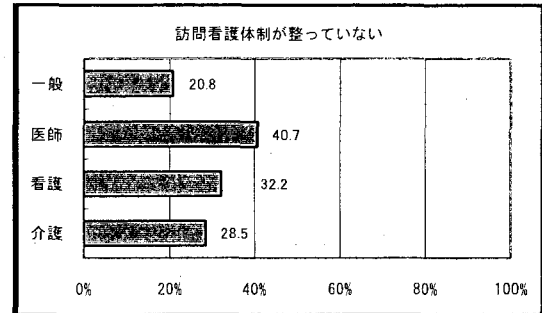
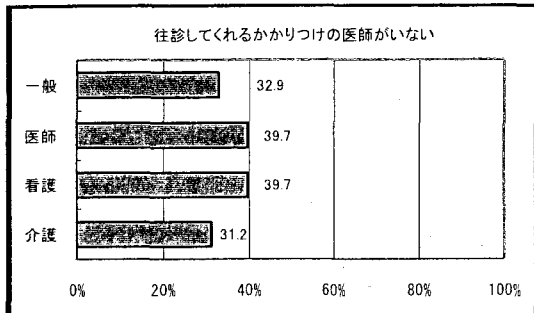


図 128

【問 53 自分の家族、または自分の担当する患者（入所者）が治る見込みがなく死期が迫っている（6ヶ月程度あるいはそれより短い期間を想定）と告げられた場合、自宅で最期まで療養することが困難な理由（問 52 で「実現困難である」と回答した者を対象）】

「介護してくれる家族に負担がかかる」、「症状が急に悪くなったときの対応に自分も家族も不安」と回答する者の割合が多かった（図 1 2 9）。



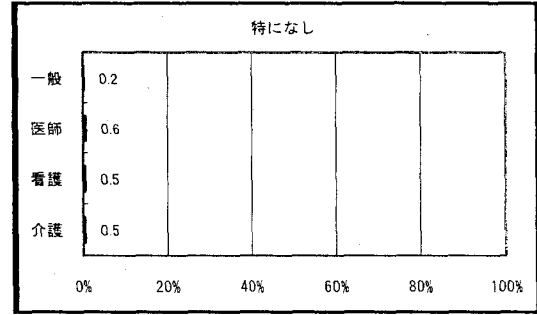
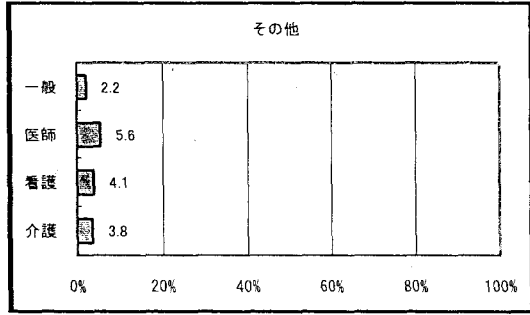
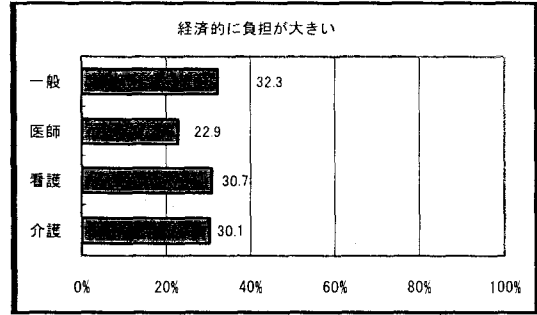
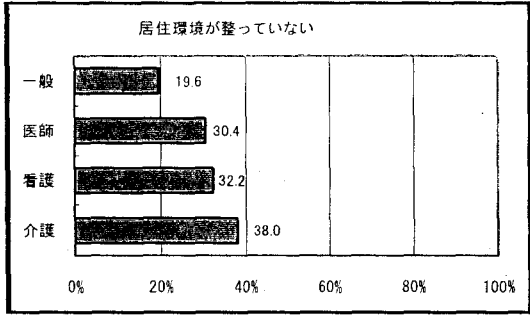


図 129

2) 脳血管障害や認知症によって全身状態が悪化した患者

【問 54 自分が高齢となり、脳血管障害や認知症等によって日常生活が困難となり、さらに、治る見込みのない状態になった場合の療養場所について】

一般国民は「病院」と回答した者の割合が最も多く、前回より増加し、「老人ホーム」と回答した者は前回より減少した。医療福祉従事者は「自宅」と回答した者の割合が最も多かった（図130・図131）。

また、延命医療について家族との話し合いの有無や年代別では、一定の傾向は見られなかった（図132～図135）。

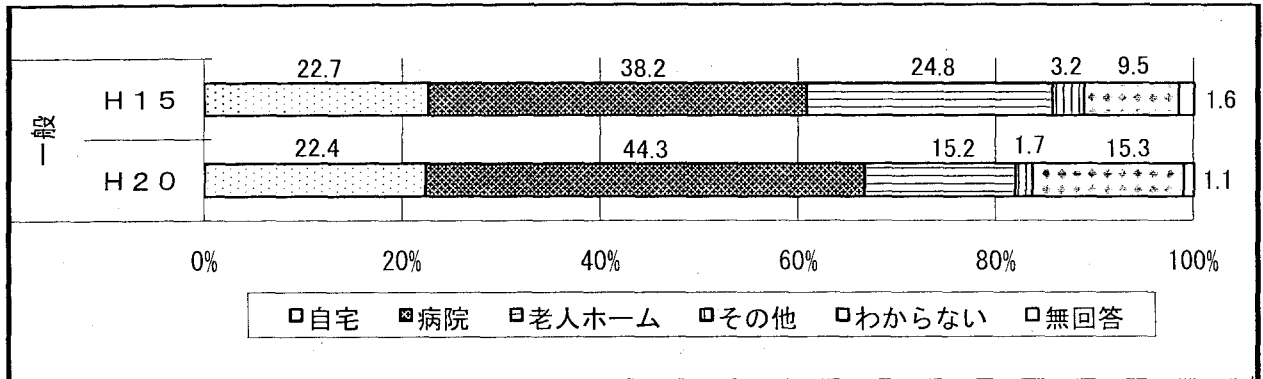


図 130

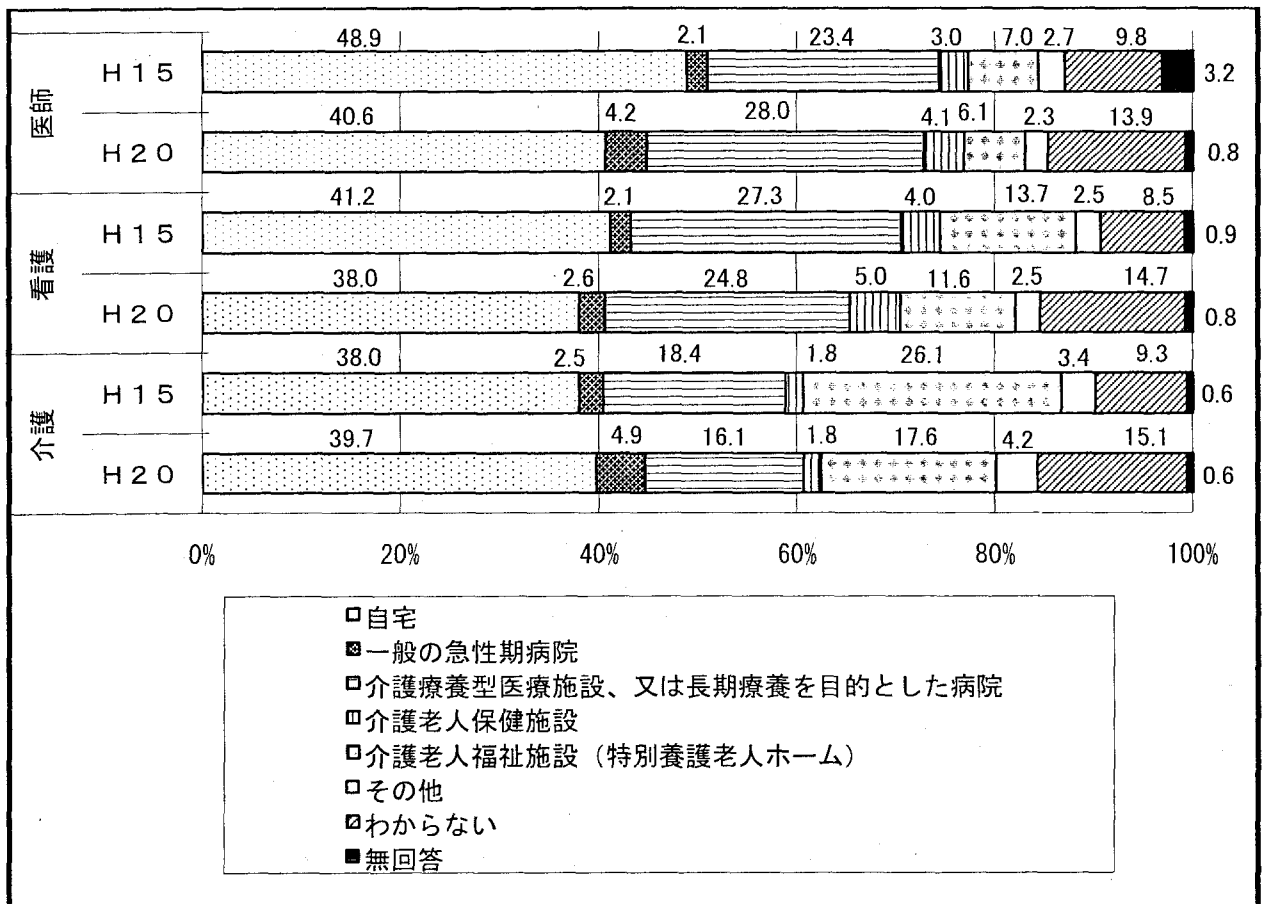


図 131

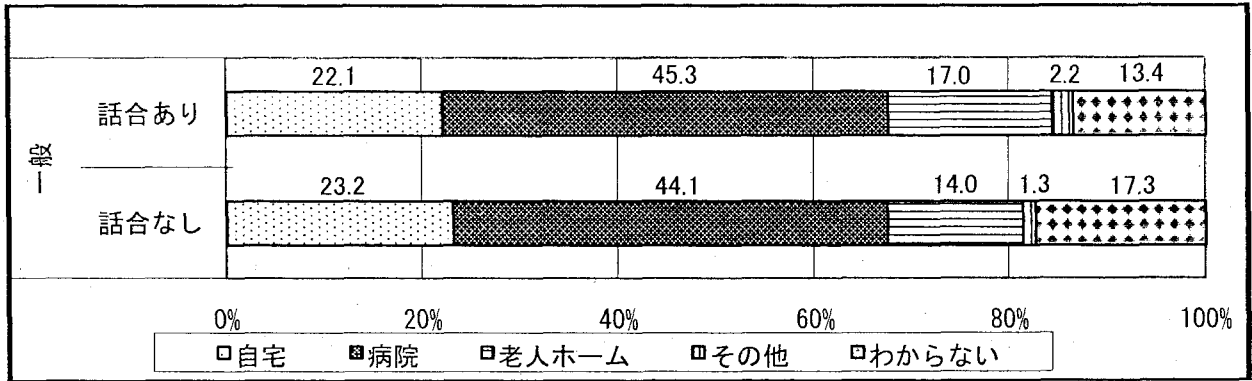


図 132

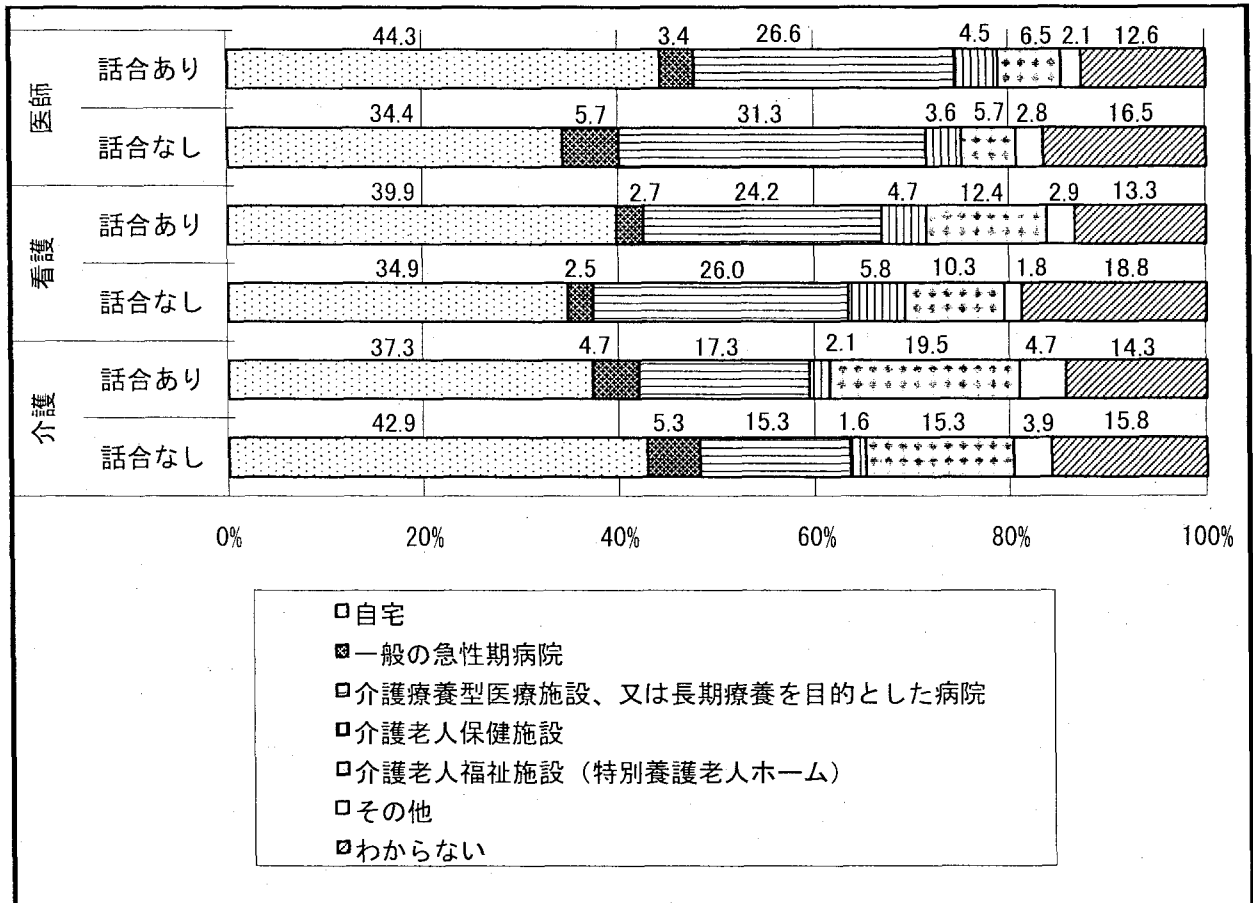


図 133

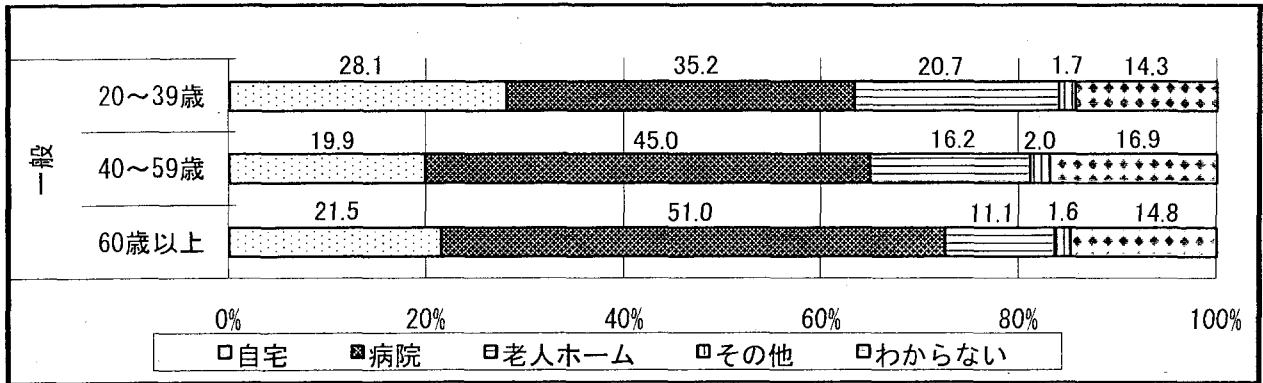


図 134

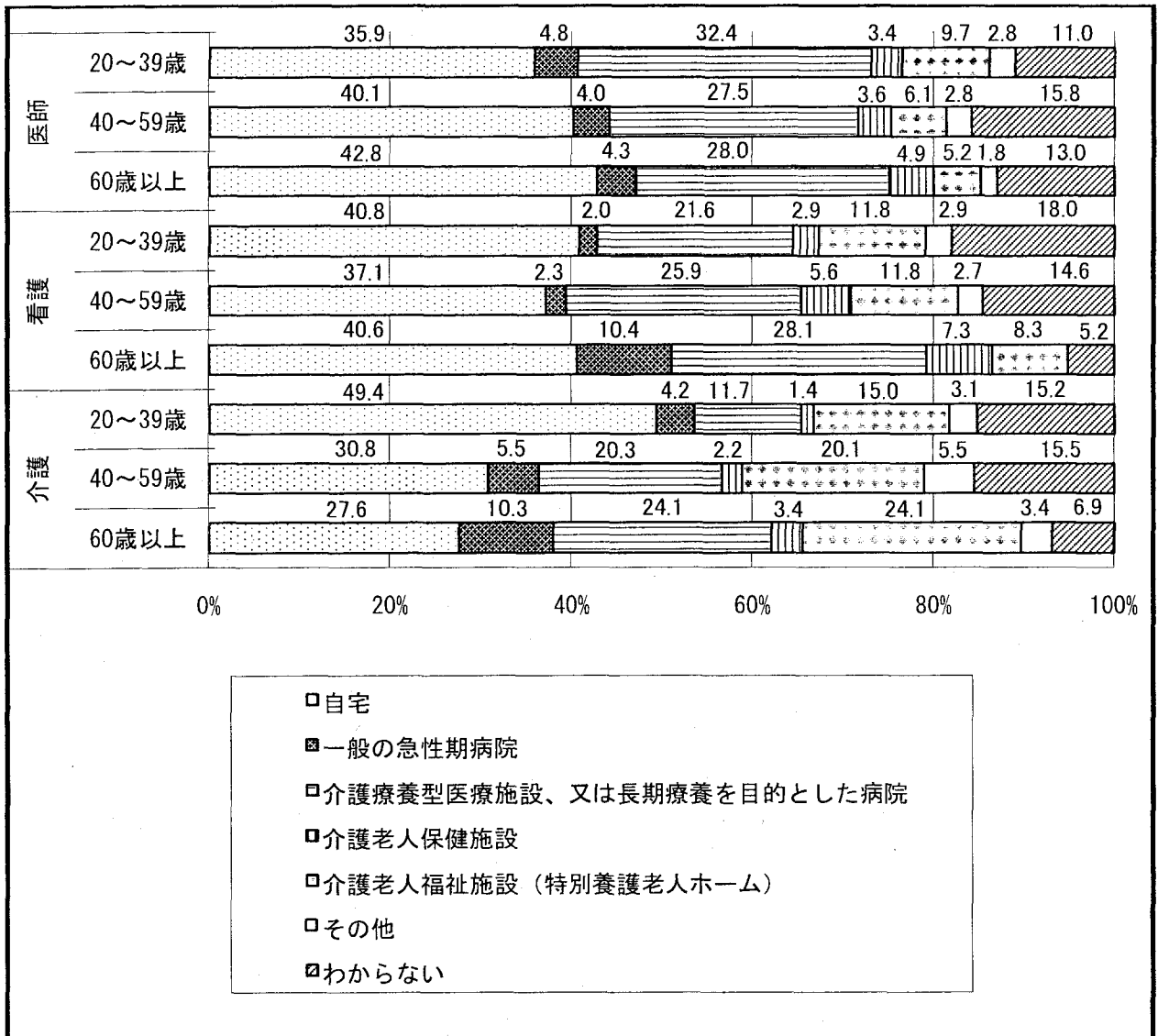


図 135

【問 55 自分が高齢となり、脳血管障害や認知症等によって日常生活が困難となり、さらに、治る見込みのない状態になった場合、自宅で最期まで療養したい理由(問 53 で「自宅」と回答した者を対象)】

「住み慣れた場所で最期を迎えたい」、「最期まで好きなように過ごしたい」、「家族との時間を多くしたい」と回答した者の割合が多かった(図 136)。

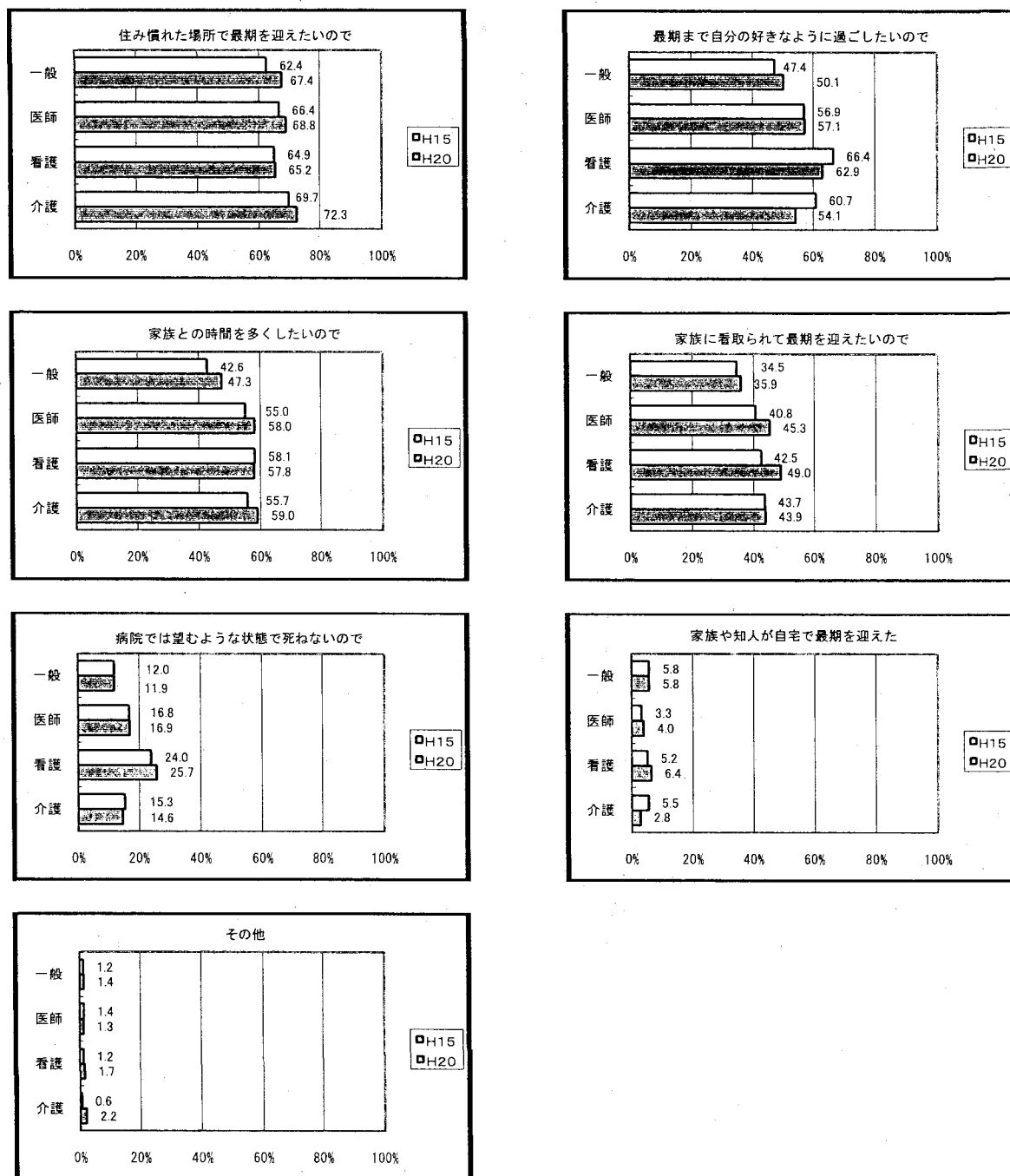


図 136